

# スポーツ実践者の存在＝時間論試論

—時間生成文化としてのスポーツ—

南 英 樹

## 1. 要旨

時間はスポーツの実践において、絶対的な物理的尺度である。陸上競技や水泳においては、いかに速くゴールに到達できるかを競い合うのであり、サッカーにおいては限られた時間内にいかに多く得点できるかを競い合うのであり、バレーボールにおいてはいかに早く規定の得点に到達するかを競い合っている。

スポーツと時間は切っても切れない関係にあるが、両者の関係を考察した論文を管見したときに見いだされる研究は、そのほとんどが限られた時空間の中で合理的に課題を達成するためのフォーム改善や、より効率的に筋肥大をおこすための摂食方法、単位時間あたりの運動量といった、自然科学的な時間尺度を基準にしたものである。スポーツと時間を対象にした論文にはこうして、競技者の身体を物理的・化学的対象物として、機械論的な身体観を土台とした視点で語られるものがほとんどである。そこで本論では、競技時間の有限性や時間的連続性を素材に、競技者の存在論について論じていきたいと思う。というのも筆者は、スポーツは、未知なる他者という未来への対峙と、その現在への取り込みによってはじめてその本質が開かれると考えるからであり、“私はなぜ今ここで迫り来る相手とこんなにもくるしい状況で闘っているのか”“破れてもなぜまた私は立ち上がるのか”という競技者のうちなる問いが啓かれると考えるからである。

上記のような競技時間の有限性と時間的連続性とを重ね合わせて考えたとき、競技とは意味の獲得をめぐる生命力と人格性の発露そのものであり、その遂行が未知へと踏み込む投企の連続体であることが明らかとなる。「競技時間の終了とともに全く行為の意味を喪失する」のでありながら、競技の意味空間を誰でもない私の意味空間として引き受け、生きるという行為によって、「我々自身の存在構造が時間の原形態を絶えず産出し続けている」その形態を現出するのである。

試合の開始とともにそれを進める（時を刻む）のは競技者である。と同時に、試合を終わらせる（時を刻むことを終わらせる）のもおなじ競技者である。競技時間の有限性によるすべての意味喪失の可能性と、他者（未知）との向かい合いによる競技の遂行は、一瞬ごとの

未来への接触と、それを現在へ次々と組み込んでいく絶え間ない自己更新という時間的展開であり、人間に定められた「存在一時間構造」を表出させるものである。一般に、スポーツ教育における目標には、競技者の自我機能を強化するということが一つにあげられるが、これを上記の文脈で考えると、“私が私である”同一性や主体性を支えるものとして自己の時間的連続性は必須となってくるといえる。つまり一瞬ごとに未知なる未来と遭遇しつつ、その体験を自己の歴史に組み込んだ上で、それでもなお一貫した存在でいられることが、競技者の基本でありまさしく自我機能の高さでもあるからである。

## 2. はじめに

スポーツ世界の意識現象の広さと深さ、そしてその独自性を理解し、主体的な実践へ導くこと。それは大学体育の領域において避けては通れない課題であるように思われる。今日、スポーツはメディアと深く結びつくことで発展し、メディアはスポーツと結びつくことで視聴率を維持・獲得し巨大化してきた歴史を持つ。そのためスポーツには「感動するもの」「健康によいもの」「人格を形成するもの」等の神話を、何の前提もなくなれば強制的に視聴者にすり込んでいるように思われ、「爽快さ」や「快活さ」、「絆」などの肯定的なスポーツ・イメージはいまや、政治や企業のイメージづくりの格好の材料となっていて、あたかもそのイメージ自体が商品であるかのような様相を呈している。しかし、実際の競技場面では、選手たちは人間関係に悩み、理想と現実のギャップに葛藤し、競技から去って行くものも少なくない。この十数年間とまらない部活離れはそうした現象のひとつであるとも考えられる。そこで、そのようにして一方的に流布されているスポーツに関わる肯定的な言説から少しばかり身を退いてみて、スポーツとは何なのか、それはどのように存在するもので、その特性はどのように現れるのかを精査し、各人にとってのスポーツとの関わり方を吟味してみるのも悪くはなからう。

本論では、第一章において、スポーツを考察の対象として設定するために、スポーツの構造と機能、発展の自己累積性について議論を展開したうえで、第二章において身体図式という視点から、スポーツに現れる身体の道具性や肉化、時間的連続性についての現象の考察をおこない、第三章においてはそれらの概念装置を用いて、スポーツの美的体験と他者との関係性における時間的連続性の一貫性についての考察をおこなうことで、スポーツは身体性を特徴としながら「時間―自己」の生成を活性させ、自己の時間的連続性に深く関わる機能をもつ文化であることを確認したいと思う。

それにしても今日、大学の体育会では、飲酒による死亡事故や京大アメフト部の集団強姦、甲南大ラグビー部の下半身露出事件、明治大学の暴行事件など、さまざまな不祥事が起きている。もしかしたら、スポーツは「バレなければ何をしてもよい」という暗黙の了解を流布

することに貢献してしまっていないだろうか。多発するこうした事件の背景には、時間的展望や時間的連続性としての自我機能へのダメージをも伏在しているように思われる。後に考察するように、スポーツは本来、ルールさえ守っていればよいというものではないし、現実逃避を促すものでもない。一般的にいわれるところの「考えながらプレイし、プレイしながら考える」という習慣による知の蓄積や、「われわれの身体」たる超越論的他者としての身体性の共有があるならば、そのような事件は本来起こりえないはずである。しかしこうした、事の前後をわきまえずに反社会的行為に手を染めてしまう選手たちがいるという事実は、スポーツにおいてさえ、言語コミュニケーションへの接触をさける人々の広がりを感じさせるものであり、感情を言語に置き換えることができず、キレることによってしか思いを表現できない競技者たちが生まれつつあることの証左でもある。

現代のスポーツ界の現状に対して、自己の時間的連続性をどのように定義し、体育・スポーツに携わるものとして競技者の生きようをどのようにとらえるのかという問いを抱えつつ、以下の論を進めたいと思う。

### 3. スポーツの構造と機能, 自己累積性

ここでは、そもそも考察の対象たるスポーツ世界がどのような構造を有するものであるのかを明らかにすることで、考察を進めるスタートラインを設定したいと思う。なぜなら、スポーツという現象を対象に考察する際、バレーボールやバスケットボール、アメリカン・フットボールに柔道、剣道、さらにジョギングやランニングまで、多様なスポーツ現象が想定されるだろうからに他ならない。多岐にわたるこのスポーツ現象を整理するためには、研究の対象たるスポーツの枠組みを設定する原理論が構築されなければならないだろう。幸いなことにわれわれは、佐藤および河野のスポーツの構造論にその足場を借りることによって、スタートラインを設定することができる。ここでは、彼らのスポーツ構造論に依拠することによって考察の前提と議論の方向性を示したい。

#### 3-1 スポーツ解釈の現状

河野は、スポーツという文化の独自性を明らかにするために、カッシーラーの文化分析の方法にならない、その構造原理を明らかにすることで、スポーツの独自性を、構造と機能、発展の面からの把握を試みている。彼によれば、それまでのスポーツ研究は、①日常的運動起源論的立場、②「スポーツ＝社会モデル」論的立場、③歴史社会的立場、④唯物論的立場に分類できるがそれらは、スポーツをとりまくさまざまな要素から規定している点で一致しているとし、反論している。①日常的運動起源論は、スポーツが日常の身体運動のうえに、人為的なシステムが構築されることによって成立したとする説であるが、これではアメリカ

ン・フットボールやバスケットボールを説明できないとして棄却される。次に、②「スポーツ＝社会モデル」論的立場は、スポーツはそれ以外の世界を、目に見える具体的な形で映し出す象徴として機能するとしている説であるが、それはスポーツの有する「記号」的な機能であり、二次的な機能であるとして棄却する。なぜなら、スポーツには他の文化領域では発揮されない能力を競技者が最大限発揮してしまうような一次的機能が備わっているからであるという。さらに、③歴史社会的立場によれば、スポーツは時代精神や物質的条件にその原動力を求めうとするものであるが、スポーツの変化や発展は、人間が生み出したスポーツとそれをプレイする人間の能力との関係から論じられることも必要であるとして相対化される。最後に、④唯物論的立場は、スポーツは生産関係と生産力を下部構造、スポーツをその上部構造としたうえで、スポーツが下部構造を構成している生産関係と生産力に依存しながら発展しているとする説である。しかし、特定の道具や施設がスポーツを発展させたというよりもスポーツ自体が自らを発展させていくなかで特定の道具や施設を選択してきたとも考えられるため、スポーツ自体のなかに自らの発展の仕方を決定する構造があると訴えることもできるとして棄却する。

確かに、このようにしてスポーツ以外の世界の原理にもとづいて、それぞれに都合のよい要素（スポーツ生成のモデルとされる既存の身体運動、スポーツを通して映し出される労働の世界、スポーツの発展を規定しているとされる時代精神や物質的な生産力）からスポーツを規定することは、スポーツの本質的な理解をゆがめることになりかねないであろう。

### 3-2 スポーツの構造

河野はこうした現状に対し、スポーツという文化の生成、機能、発展をそれ自体の内在的な構造に即して明らかにすることを試みている。彼によれば、スポーツと他の文化との差異は、その構造だけにとどまらず、その構造が担っている機能および発展の仕方におよんでいるという。歴史的および社会学的条件を提示するだけでは十分ではなく、それらの文化を支えている一般的な構造原理を記述的に分析することが重要なのである。

こうして導き出される彼の議論の要点は以下のように集約されるが、その最初にあげられるものがスポーツの構造である。

スポーツの構造は、スポーツ現象の背後にあって、それらに一定の意味を与えているものである。それは、プレイする当該の競技者が集団で行為をおこなうために生みだしてきた人為的・社会的な制度として存在する。例えるならば、ソシユールの言語学における文法体系（ラング）と発話行為（パロール）の関係であり、日本語の発話行為が日本語の文法体系を獲得している社会においてはじめて意味をなすように、相互作用によってはじめて成立するものである。

こうしたスポーツの構造が「スポーツを、各競技者の身体運動とともに始まり、それとと

もに終わる個別的で有限的なプレイとして存在」させ、「われわれのプレイを特定の身体能力の競い合いに向けて組織」させている。つまり、各スポーツ種目が、それぞれこのような構造として確立され、プレイをされるべき対象としてわれわれの前に対峙して存在するようになったとき、はじめてスポーツは成立するということでもある。「われわれがスポーツをプレイすることを通して特定の身体能力を競い合う事ができるのは、スポーツ構造と呼ばれるべきこの構造をそれぞれのスポーツ種目が有しているから」なのである。

こうして、競技という文化的な行為は、スポーツの構造とプレイの相互作用によってはじめて成立すると考えられる訳だが、しかし、スポーツの構造はスポーツ・ルールそのものと解釈するべきではない。

佐藤<sup>1)</sup>は、スポーツ現象とスポーツ構造を構成する契機として、「身体的契機」、「知的契機」、「感性的契機」をあげ、それぞれが有機的に絡み合いながら自律的に存在している複合的構成体として規定する。

まず「身体的契機」とは、例えば野球を特徴付けている「ピッチング」や「バッティング」といった独自の運動様式として存在しているものである。これらは客観的な形式として、身体能力、知力、精神力を統合させるものであり、野球というスポーツの構造の一契機を成しているという。

つぎに「知的契機」とは、そうした運動様式を生みだすルールである。先述した「バッティング」という運動様式は、「ピッチャーの投げたボールをバットで打ち返す」というスポーツ・ルールによって産みだされたものである。スポーツ・ルールと運動様式は相互規定的な関係にあるという。

そして、このスポーツ・ルールの形式を規定しているのが、「感性的契機」の一つである価値観である。他の競技と比べてピッチャーとキャッチャーの直接対決を可能にしている野球のルールは、それを生みだしたヒーローを好むアメリカ人の価値観によって規定されているという。

確かにスポーツ構造は、スポーツ・ルールのみ還元されるものではない。こうして「身体的契機」「知的契機」「感性的契機」によって自律的な構造を有するようになることで、各人のプレイから独立して歩み始めるのであり、競技者に独自の機能を働かせるようになるといえよう。

### 3-3 スポーツの象徴化機能と累積性

そうしたスポーツの構造とプレイの相互作用を土台として、スポーツはその象徴化機能と累積性を発揮するという。

あらゆる文化はそれぞれに独自の能力を表出させる力を持っている。将棋や、囲碁、チェスはそれぞれに体系づけられた構造を持ち、その構造の規則体系に従ってプレイすることで、

独自の形式を与え、潜在的な可能性を表出し、発揮させる象徴的な機能をもっている。それと同じようにスポーツは、可能性として潜在している人間の身体能力を比較級や最上級に変えて表出させる象徴的な機能を持っていると考えられる。

「スポーツを構造として捉えた場合、われわれがサッカーやバレーボールといった名辞を与えている各スポーツは、それぞれ独自の運動様式、スポーツ・ルール、価値観の各契機が相互に結びつけられた有機的な構造（システム）を構築している。これらの各契機は、潜在的な形で存在している人間の身体能力と自己の様態にそれぞれ独自の形式を与えることで、それを積極的な形に転化し、表出させている。つまり、スポーツは人間のなかに秘められた身体能力を特化された形式を通して抽象化し、それを比較級や最上級の形で表出させるために機能しており、その点で象徴的な機能を担っている。」

スポーツ構造の契機たる運動様式（身体的契機）、スポーツ・ルール（知的契機）、価値観（感性的契機）はそれぞれに人間の身体能力に形式を与えることによって、われわれのなかに漠然と潜在している身体能力を象徴化するのである。バレーボールというスポーツを独自のものにして「アタック」や「ブロック」という運動様式によって、スポーツ・ルールに規定された、一定の高さのネットを介して敵と味方が対峙し、3回以内の接触で返球するというスポーツ・ルールによって、日本人の価値観によって形成された「拾うバレー」によって、人間の潜在的な身体能力に形式が与えられ象徴化されることができると考えることができる。さらに、その発展形態たる自己累積性が特性としてあげられるという。

言語が、「弟」に対して「兄」を、「妹」に対して「姉」を産みだし差異化しながら、日本語の文法体系に組み入れられていくように、バレーボールでは、既存のAクイックという攻撃形態からBクイックが生まれ、さらにCクイックが生まれるという差異化の機能によって、次々とバレーボールの構造の中に組み込まれていくことによって自己累積的に発展してきたという歴史を持っている。スポーツの構造を基盤にして考えるとき、「自己累積的」と名付けることができるような変化・発展をしてきている。「技や戦術としてスポーツ構造のなかに組み入れられたある競技者の能力は、他の多くの人間の能力を媒介することによって、技や戦術の産出者をも拘束下におくような発展（生の自己疎外）を遂げるようになるが、これに対して競技者は、新たなプレイ（スポーツ現象）を創り出すことによって、それを克服してきたのである。」

象徴化機能によって産みだされた行為は、差異的变化と自己累積性によって発展過程をたどるようになる。そうして細分化、高度化したバレーボールの構造はまた、競技者によって共有・記憶され、優れた能力をもつ競技者がさらにそれを更新していくという自己累積性を有するのである。

さらに、その差異化と自己累積性は一つの競技内にとどまるものではない。バスケットボールという種目は、アメリカン・フットボールやラグビー、サッカーという競技との差異化

から生まれてきた競技であり、こうして産まれた新たな競技内においてもまたさらに自己累積性によって発展過程をたどるようになるのである。

こうしてスポーツは、その産出者である人間から独立し、自己累積的に変化・発展していく自律的な構造を有することによって、それをプレイする人間の身体能力を最大かつ多様な形で表出しつづけているという点で、独自の文化的な役割を担っていると考えられるのである。

スポーツの構造をスタートラインに設定することによって、スポーツ文化の特殊性が明らかになった。なかでもその象徴化機能と自己累積的機能は、スポーツ構造とプレイとの相互作用によって、人間の実存と関わりつつ、変化・発展する構図が導かれた。次章では、競技者の実存的な「身体—自己」の考察へと議論を進め、その構造を導き出すことを試みてみたい。

#### 4. 身体図式と身体の3様態

前章において、スポーツは、スポーツの構造を有しプレイとの相互作用によって生成し、象徴的機能によって身体性と自己を表出するものであり、自己累積的に発展していく文化であることが確認された。この章では、そうしたスポーツの構造の意味連関に身をゆだねる実践者の身体性と自己について現象学的に考察を展開し、その実践者へのスポーツ世界の現れを明らかにすることを試みたい。

##### 4-1 身体図式と時間的連続性

さて、そもそも世界とは、この私にとってどのように現れているのだろうか。いま私は机の前の椅子に座りキーボードのうえで指を適宜動かしながら、文章を書いている。適度な明るさを保つ照明によって机とモニターとが照らされており、当面の情報の整理に必要な書類だけが机の上に拡げられている。前方の壁には一面に論文の構成を書いた張り紙が並んでおり、さらに机の周囲には書棚が置かれ、論文を書くための本や書類が必要に応じて取り出せるようになっている。こうした周囲世界性があるから私の身体の働きかけが可能であるのだが、この周囲世界性も私の身体の働きかけによってのみ意味をもちうるものとして開かれている。

こうして私の空間は、私の身体に馴染みよいものになるように私の身体図式に基づいて構成されている。身体図式とは、「自己の身体の全体、あるいは各部分の空間的關係についての直観的な心象」である。私の椅子は適度な高さで柔らかさを備えており、長時間の仕事によって腰が痛まないように調整されている。照明は眼に直接光が入らない高さにしつらえら

れており、書類は椅子に座っているこの私から手の届くところに置かれ、キーボードとモニターは適度な位置と角度で配置されている。

さらに私は、パソコン上のソフトを通じていつでも家族とテレビ電話が可能になっている。私の眼は机の前に座っていながら、1000km離れた場所をみることができる。このとき私の眼は千里眼の様相を呈している。もし、私が月面上の観測機を動かすことができるのだとすれば、私の手は月まで伸びていることになる。こうして現象学的身体論の立場に立てば、私の身体図式は広がっているのである。

このように、とくに論文の締め切り日に追われているわけでもない状況での私は、自分の「ペース」で、友人との連絡もとりつつ、こつこつと論文の執筆を続けることができている。私の身体図式はその都度の必要に応じてキーボードを通じて、電話を通じて、書物の世界に引き込まれて、広がる。私に馴染んだ世界は、意味連関が整理され、私の身体に特別な配慮を払う必要もなく、時間はゆったりと進んでいるように感じられている。このとき私の世界性は、過去 = 現在 = 未来の時間的連続性<sup>2)</sup> が秩序づけられ、身体は意識の志向性に導かれながらなかば自動的にキーボードを打ち、本のページをめくり、仕事をひとつずつこなしている。

ところが、締め切り日に間に合いそうにないということになると、私の世界は混乱に陥る。どうしてもっと早く準備しておかなかったのか、どうして私の指はこんなにキーボードを叩くのが遅いのか、締め切り日までに乗り越えなければならない課題が一挙に私の世界を埋め尽くし、私の時間的連続性の一貫性が崩壊の危機を迎える。このとき私の心臓は早鐘を打ち、指は震え、緊張で胃が痛くなる。

こうして時間的限界に基づく時間的連続性の機能の乱れは身体図式へも影響を及ぼし、挙動はぎこちなくなり、生理的にも追い込まれてしまうと考えることができる。

#### 4-2 身体の3 様態

私に馴染んだ周囲世界において、身体の動きはほとんど自動化され道具化されている。道具化とは「のために」ある身体であり、その馴染み深さによって透明なものとなっている。つまり、文章を練ることに集中している私は、キーボードを叩くことには集中していない。それは無意識化し、自動化されている。

しかし、キーボードを自在に操ることができるようになる過程においてはその限りではない。キーボードは私にとって未知のもの（他者）として現れ、キーボード上の記号に指示された通りに指先を動かさなくてはならないものとして現れている。キーの配置を記憶している私と、私の身体の間には大きな溝が存在していて、入力の際に視線をモニターから外してキーの場所を確認し、キーを叩いては入力の正確性をモニターで確認するという、実に疲労をとまなう作業が繰り返される。身体はこわばり、肩がこり、指は痺りそうになる。このと

き、私の身体は肉化しているのである。肉化とは、「自動性を失った自己感覚に乏しい身体運動における他者性の現出」<sup>3)</sup>であり、「のために」というテーマの喪失である。肉化した身体は「のために」が奪われ、投企が奪われている。つまり文章を書くためにキーを叩いているときその身体は自動化し道具化されているが、キーを叩くためにキーを叩いているときその身体は「のために」という目的論的なテーマを失い肉化している。

こうして、世界への馴染み深さによって身体は道具化し、世界の疎遠さによって身体は肉化する。それはつまり、この私の周囲の世界の意味の構造は、私の身体の意味の構造と、相互に根拠づけ合っていることをも意味するものである。

さらに、こうした道具的身体・肉的身体は、自然的身体に根拠づけられている。私は文章を書くことに集中しているこの瞬間、心臓の停止や呼吸機能の停止を心配していない。日常的に自然的な身体は、「自ら然るべく在る」ものとして解釈されており、隠れている。それは私の身体が自らの力で次の瞬間も存在し続けるであろうことを私が信じているからに他ならない。この自然的身体が現れるとき、それは驚異として現れる。不整脈や筋肉の痙攣、骨折などによる自然的身体の突然の現れは私の身体が肉化で覆われ、世界が奪われる（世界＝内＝存在を停止する）死の可能性に直面することである。こうして「世界という地平が暗くなる」とき、その馴染み深さは失われ、自然は地平の向こう側から、私を支える力を失いつつ、私の道具として、あるいは私を道具化し、支配する他者として登場する<sup>4)</sup>のである。

こうして身体は、道具的身体、肉的身体、自然的身体の3様態として把握されることができよう。では、こうした身体はスポーツ実践者にはどのようにして現れるのであろうか。

#### 4-3 スポーツと身体図式

私たちは私の身体を知っていると思っているほどに、自分の身体について語れるものではない。私たちは、内臓の機能や筋繊維の回復について、その客観的な状態は知るよしもないし、ましてスポーツを無我夢中でプレイした後など、自分の身体がどんな動きをしていたかを言語化して話すことなどほとんど不可能に近いだろう。だからこそ、スポーツ実践者はプレイの後にミーティングを開いて試合の内容を互いに確認するのである。そして、彼（彼女）に固有の世界の開示を確認し日常の意識と相対化し、自己の歴史として取り込もうと試みるのである。

ではプレイする競技者の意識にはどのような世界性が開けているのだろうか。バレーボールのルールによって構成されたネットとコートという人為的空間は、そこでプレイが行われるとき、単なる物理的な空間から実存的な空間へと変化している。自陣のネット際にトスされたボールは、机の上に置かれたボールとは異なって、自分の身体能力を結集し、舞い上がり、自分の実存をかけて相手コートへ落とさなければならない対象に変貌しているのである。

こうして現れる世界は、ボールの回転やゴールの位置、敵陣の選手の配置や、味方の援護

など、それぞれの状況によって、競技者に様々に気分づけられて現れている。われわれは気分に応じて動揺しつつ「世界」をみるのであり、そのときにこそ道具として扱われる存在者は、一日として同一ではないその特殊な世界性においておのれを示している。道具的存在者とは「物理的間隔」ではなく、「存在的距離」において示されている。例えばメガネをかけて周囲の世界を見渡すとき、当のメガネは物理的間隔においては私の身にもっとも近いところにありながら、存在的距離においてはもっとも遠くにあるといえる。これをスポーツの空間に読み替えれば、ゴール前で競り合うランナーの1メートルの物理的間隔は、追い抜こうとするランナーにとっては5メートルにも10メートルにも感じられる存在的距離を有するといえよう。こうして、スポーツ実践においては、スポーツ・ルールによって規定された空間そのものあるいはそこに現れるさまざまな位置関係が、単に数値によって測られる以上の意味をもってスポーツ実践者に現出するのである。

スポーツの構造はスポーツ実践者を日常とは異なる意味連関に埋め込むのであった。そこでは当然のことながら、日常とは異なる運動技術とそのための身体図式の獲得が迫られることになる。当該の競技に有効な身体図式は、合理的な練習の反復と工夫によって、少しずつ獲得されていく。道具的身体と肉的身体の間を幾度も往復しながら、運動技術は少しずつ確実なものとなっていく。さらにそれは自然的身体にも影響を与え、身体の形質に変化を及ぼすものである。こうして獲得された身体図式は、身体への意識を常に伴わずとも合目的かつ自動的に作動するものとなっている。その身体は、前意識的に、前認識的に先行し、私を導く。スポーツは、身体能力だけでなく競技者の自己をも象徴化している。スポーツは、選手の人種、国籍、社会的地位、兄弟関係すらも無効にすることで、「自己の実存が姿を現はす」(今道)世界を構築している。例えば、サッカーにおいて、敵のゴール前にいる自分にパスされたボールをシュートすることを通して表出されるのは、「自分のシュートでゴールを決めることができた自己」あるいは「それを決められなかった自己」のどちらかである。こうして私は常に事後的に「……できる自己」と「……できない自己」を認識し、自己の歴史性として書き込まれていく。こうして行為的自己と認識的自己の時間のずれに基づきながら、自己が形成されていくこととなる。

身につけた身体技術と身体図式は、試合という試し合いの場において、未知なる他者と向かい合う。他者の現れによって、投企する道具的身体は抵抗に遭い、抵抗された身体は肉化されんとする。しかし、経験に基づいて構築された時間的連続性によって次々と抵抗をかわしつつ競技は進行していく。他者とのせめぎ合いは、私の身体における道具と肉の交叉であり、道具的身体にともなう「投企」と、肉的身体にともなう「投企の差し押さえ」とのせめぎ合いである。それは、必然的にそれぞれの時間的連続性の一貫性を試し合う場となる。競技は、構築された自己の歴史性をめぐっての闘いなのである。

## 5. スポーツの美的体験と意味の奪取・喪失体験

さて、前章では、スポーツの構造にもとづく未知なる他者との向かい合いによって、スポーツ実践者に現れる世界性を明らかにし、身体のもつ道具性と肉性が、時間的連続性に支えられつつせめぎ合い、自己の歴史性をめぐって展開されることが明らかになった。この章ではさらに、スポーツの構造によって現れた世界性において競技者が経験する美的体験と、スポーツの構造によってもたらされる意味の奪取・喪失体験に関して、身体図式と時間的連続性という視点から考察を試みたい。

### 5-1 スポーツの美的体験

さて、スポーツの美的体験とはどのような構造をもつものだろうか。樋口<sup>5)</sup>は、気分という概念装置を用い、スポーツ実践者の意識現象を美学的に分析、構造化し、スポーツ実践者の美的体験について解明している。

彼によれば、スポーツ実践者の美的気分は、その被護性にあるという。スポーツの世界は、始まりと同時に刻々と終わりへと至るという時間性によって起動する意味的構造体である。スポーツの時間性は、意識の流れという内的時間意識を産出し、競技者の生の目的を方向づけている。そこでは「何のために生まれて何をして生きるのか」という人生における問いはひとまず括弧に入れられている。スポーツの構造の一契機であるスポーツ・ルールは、競技者を日常とは異なる意味連関の編み目のなかへと埋め込んでしまう。スポーツ・ルールを無視する競技者は、規定された空間の内部に存在することすら否定され、「レッド・カード(退場)」によって排除されることになる。こうして一定の形式が確保されることで、競技者には被護された規定の時空間において日常とは別様の意味世界の構成に参加することが可能となる。

そうした時空間のなかで、競技者は「瞬間」において内的自然の技巧と外的自然の技巧の相互浸透という美的体験をするという。それこそ身体図式でいうところの身体の広がりやの体験である。それは「主観一身体」＝「客観一身体」＝外的自然という統一がなされた瞬間であり、試合の勝敗に関わりなく、それ自体が永遠として記憶に刻印される「永遠のいま」としての美的体験である。それはスポーツ技術によるものであり、スポーツ技術の意義は、人間の身体そのものにある美的可能性と自然のもつ技巧的性格を活性化させ、現実的に実践者に運動感覚的知覚としての美的気分を与える場を提示するというところにある。しかしスポーツ技術は、道具化、無意識化され透明なものとなっていなければならない。それによって、「客観一身体」が消え去り、「主観一身体」＝外的自然という「完璧な瞬間」が訪れるといえる。

ところで、弓道の名人は、的に矢が的中することを先取りして矢を放つという。そこでは

道具の身体はすでに的まで届いているといえよう。射の基本動作として射法八節があり、足踏み→胴作り→弓構え→打越し→引分け→会→離れ→残心の過程を踏む。これは、目の高さを一定にし、足元から土台を作り、姿勢がぶれないように安定させうえでの出会い、射のあとまで「主観一身体」＝「客観一身体」つまり内的自然の技巧を見極める手続きであると同時に、その所作をひとつひとつ踏むことで時間的連続性の安定をはかっているといえよう。<sup>6)</sup>

スポーツの美的体験の分析から、道具の身体に内包されている時間的連続性に支えられて内的自然の技巧と外的自然の技巧の相互浸透をもたらすことが明らかとなった。しかし、こうした美的体験は、得点する、試合に勝つという意味の獲得の体験とは、異なるものであるように思われる。そこで、スポーツの構造的意味の獲得について考察を進めてみたい。

## 5-2 構造的意味の獲得と内的時間意識

スポーツの構造が有する競争性は、他者との出会いをその本質とする。他者と向き合うことは、未知と向き合うことであり、未知なる未来と向き合い、未知と身体が会うことである。私の身体が、道具性を維持し他者を凌駕できるのか、それとも肉化されてしまうのかという攻防は、投企を続けられるか、投企を差し押さえられるかの攻防でもある。

他者と与しながら、スポーツ・ルールに規定された意味（ボールをコートに落とす、他者の上に乗る、ゴールに入れるなど）を獲得するとき、練習から積み上げてきた時間的連続性の延長として、その競技者は自我機能を強化する。試合での意味の獲得は、そうした自己の歴史性を証明するかのような体験であり、それは、他者の身体さえも私の道具として取り込む体験である。そのとき私の身体は他者の身体の中へ侵食し他者の身体を道具化しているのである。これは、なにも特別な事態ではなく、自一他の分化が進んでいない幼児が自分の手で届かないものを、母親の手を取って掴ませようとする行為にその原初形態がみられるのであり、ここでは自分の身体を母親の身体へ侵食させて道具化しているのである。

しかし実際には、試合に勝っても喜ばない競技者がいるし、逆に試合に負けてもその内容に納得している競技者もいるのはなぜだろうか。

それは先に述べたスポーツの美的体験を支える「主観一身体」＝「客観一身体」＝外的自然の相互浸透に失敗したからであり、結果はあくまでも運によるものであると判断しているからであろう。試合のなかでは、状況によって「主観一身体」≠「客観一身体」＝外的自然という図式や、「主観一身体」＝「客観一身体」≠外的自然という図式が頻繁に起こるのであって、三者の相互浸透を経験せずに、勝利したという結果のみによって手放しに喜んでいられる競技者は、本質的にスポーツの美的体験をしていないのである。

このように意味の奪取（得点や勝利）というのは、内的時間意識に基づいた自分の理想的なプレイ像「主観一身体」の投企に基づいていなければ、その価値は半減するといつてよい

のである。「私は勝つ」「具体的にこういう方法で勝つ」という強力な時間的連続性に基づく自己投企があるからこそ、美的体験は至高のものとなるといえるであろう。

### 5-3 構造的意味の喪失と内的時間意識

われわれは先に、肉的身体における投企不能性をみた。投企が不能となった身体は時間的連続性を奪われている。時間的連続性を奪われた競技者の自己とはどのような様態を呈することになるのだろうか。

それまで競技者の内面において安定していた過去—現在—未来の時間的連続性が、肉化において、その安定が崩れそうになる瞬間がある。緊張した状況で他のことを考えながら煙草に火を点けると、煙草を逆に口にくわえてみたり、マッチを擦過面とは逆の面に擦り続けてみたりすることがあるが、こうした時間的連続性の崩れは競技能力の破綻をも意味する。競技中の失敗や成功は、時間的連続性を維持するために、意識的・無意識的に関わらず整理されつづけなければならない。競技者が取り返しのつかない失敗をしたと感じるときに、彼の時間的連続性は動揺するのである。

木村<sup>7)</sup>によれば、内的時間意識の乱れは存在構造論的に3つの様態を呈するという。

①アンテ・フェストウム (ante festum, 祭りの前) とは、自己実現を遠い未来次元に求める傾向で、換言すると、現在において確たる自己が未成立であることを意味している。これは、現状の正確な把握ができないまま賭けに出してしまう精神的態度であり、“～しさえすれば” というように、現状の否定と未来への憧れが強く込められている。それゆえ成功の可能性もあるが、単純なミスですべてが台無しになってしまう可能性のどちらもが投影されるといえる。

②イントラ・フェストウム (intra festum, 祭りの最中) とは、その都度の刹那を生きる傾向とされている。意識が目の前の出来事に強く集中し、その前後の時間的なつながりは乏しい。前後の脈絡のないままにボールを追いかけるボール・ウォッチャー<sup>8)</sup> になりやすい精神的態度であり、「木を見て森を見ず」と捉えられるような全体性を欠いたプレイに走ってしまう。

③ポスト・フェストウム (post festum, 祭りの後) とは、住み慣れた秩序の範囲から出ようとしない保守的な生き方であり、未来を未知なるものではなく、既存の過去のデータから予測可能なものとする傾向をもつ。失敗を恐れ、これまでの成功体験に則った行動しかとれない攻撃は単調となり、本人が気付かぬうちにプレイが読まれやすくなるような精神的態度といえよう。

こうして、身体図式と時間的連続性という視点から競技を眺めたとき、その美的体験は道具化され無意識化されたスポーツ技術と時間的連続性に支えられ、内的自然の技巧と外的自

然の技巧の相互浸透をもたらすといえよう。逆に、時間的連続性の喪失は、「のために」の喪失であり、身体的肉化であって、刻々と変化する状況のなかでの0.1秒を争うスポーツにおいて、競技能力の破綻すら意味するといえよう。

## 6. 結語：時間＝自己生成文化としてのスポーツ

スポーツは、スポーツ以外の世界の原理にもとづいて、それぞれに都合のよい要素にもとづいて存在根拠を規定されがちである。しかし、その内的構造に眼を向けるとスポーツは、スポーツの構造とプレイの相互作用によって生成し、身体性と自己を象徴化する機能を有し、自己累積的に変化、発展していく自律的な文化であるといえる。

そうしたスポーツ構造によって特定の意味連関に埋め込まれる競技者は、身体と自己を象徴化する機能によって多様な意識の現れを経験する。その意識の現れは身体図式の獲得過程によって説明される。私の身体は身体図式によって日常の世界に馴染んでいる。スポーツの構造は、そうした身体に新たな身体図式の獲得を迫る。合理的な練習の反復と工夫によって、競技に有効な身体図式は獲得され、その身体は、常に意識を伴わずとも目的的に自動的に作動するまでに至る。獲得された身体図式は前意識的に、前認識的に先行し、「私」を導く。しかし、試合における他者の現れによって、投企する道具の身体は抵抗に遭い、肉化の危機を迎える。他者とのせめぎ合いは、道具の身体（目的を達成した自己）にともなう「投企」と、肉的身体（肉化された自己）にともなう「投企の差し押さえ」のせめぎ合いであるといえる。

こうしたせめぎ合いのなかで、競技者は美を経験する。それは、内的自然の技巧と外的自然の技巧の相互浸透であり、「主観－身体」＝「客観－身体」＝外的自然の統一である。その統一は、道具化され、無意識化されたスポーツ技術によって達成される。

こうした美を経験しつつ、他者の現れを克服し、肉化の危機を乗り越えた道具の身体は、他者を取り込み道具化し、世界に馴染む。認識的な自己は、世界に馴染んだ自己と十分に馴染めなかった自己を事後的に認識し、練習の創造によってさらに高次の身体図式の獲得へ投企を開始する。それは、さらに高次の世界の開きへの投企の開始でもある。

逆に他者を克服できない身体は肉化する。肉化とは投企を失うことであり、他者に道具化されることである。投企を失うことは時間的脱自を失い世界の開きを失うことである。投企を「差し押さえ」られ、時間的展開（投企：戦術）を失った「私」は、それを支える時間的連続性に、遅延、分断といった狂いを生じる。現在＝過去＝未来のバランスが崩れ、一次的な病的状態に陥る。それは、アンチ・フェストゥム、イントラ・フェストゥム、ポスト・フェストゥムといった存在構造論的に病的な状態である。

スポーツは、その始動と同時に、すべての行為が無意味（無駄）になる試合の終了へと向

かうなかで、未知なる他者と身体として対峙しつつ未来（身体図式による投企）と出会い、時間的展望を揺るがされながらも、現在に組み込みつつ、自己の時間的連続性を構成し続ける自己更新の構造を表出する時間生成文化である。こうした人間存在の時間的構造を表出させるメタ構造をスポーツが有していることが、その自律的な変化、発展の原動力となっている。樋口がスポーツ観戦者の美的体験は、生命力と人格性の発露にあるとする所以である。

このように、スポーツは単なる身体的事象ではない。ともすれば「遊んでいるだけ」にみられるスポーツは、時間論的に豊かな世界を形成している。スポーツによって自然物としての身体（強いカラダ）を作るだけでなく、スポーツに内在する構造と機能の理論を確立・伝達し、スポーツ文化の特殊性を認識しつつ、それぞれのスポーツへの実践へと誘うことが、生涯スポーツの実践へと導くためにも重要であると筆者は考える。生物として生まれた「ヒトのからだ」を、文化を担った「人間の身体」として、身体面からの人間化をはかる身体教育は、知性・感性・身体性のバランスをはかりつつ、社会的自立を促す教材としてスポーツを機能させなければならない。

無縁社会化した世の中は、孤独死や孤立死を産み、遺品整理業者はこの10年で3,000社を超える勢いである<sup>9)</sup>。世代を超えたコミュニティの再形成が急がれている。さらに、学校体育は生涯スポーツ、コミュニティ・スポーツの土台作りとして「楽しい体育」を標榜した。しかし問題は「楽しい」の解釈であり、公的資金の注入削減にもとづく市場原理にゆだねられた「楽しさ」は、スポーツに関わる意識現象の広さと深さを一面的にしか教えることはない。

われわれは身体として存在している。人間存在にとっての身体性とは、身体における自然性とは、身体における文化性とはなんだろうか。時間的連続性を、未知なる他者とともに紡ぎ出していく行為がスポーツの本質だとするならば、大学体育はこうした問いにも答える準備をしておかなければならない。

注

- 1) 佐藤臣彦（1993）『身体教育を哲学する』北樹出版
- 2) 村田（2008）は、時間的連続性を、「過去・現在・未来の重みが個人のなかでほどよく統合されており、個人が昨日までの自己をしっかりと引き受け、未来を志向しつつも現在を主体的に生きる態度」としている。
- 3) 湯浅慎一（1986）『身体の現象学』世界書院
- 4) 同前 p. 186
- 5) 樋口聡（1987）『スポーツの美学』不昧堂
- 6) これは、パフォーマンス・キューを形式化したものといえよう。単純な動きの一部のみに意識を向けることにより、注意集中の喚起を促す方法である。
- 7) 木村敏（1982）『時間と自己』中央公論社

スポーツ実践者の存在 = 時間論試論

- 8) ボール・ウォッチャー (Ball Watcher) とは相手オフェンスやボールの動きに対応できず、「ボールをただ見ているだけ」の状態のことである。
- 9) NHK スペシャルあなたらしい老後と死は？ —無縁社会の中で—

参 考 文 献

- 一川誠 (2008) 「知覚体験の時間的特性と心的時間」『時間学概論』 恒星社厚生閣
- 大築立志 (2006) 「つもりと実際」『Sportsmedicine』 第 80 号
- 遠藤俊郎 (2007) 『バレーボールのメンタルマネジメント』 大修館書店
- 河野清司 (1997) 「象徴形式としてのスポーツの構造論的研究：その生成、機能、発展を中心に」『体育学研究』 第 42 号
- 木村敏 (1982) 『時間と自己』 中央公論社
- 木村敏 (2000) 『偶然性の精神病理』 岩波書店
- 佐藤臣彦 (1993) 『身体教育を哲学する』 北樹出版
- Heidegger, M. (1927) Sein und Zeit. 細谷貞雄・亀井裕・船橋弘訳『存在と時間』 理想社 1963
- 樋口聡 (1987) 『スポーツの美学』 不味堂
- 村田直子 (2008) 「自己の時間的連続性に関する臨床心理学的考察」『大阪大学教育学年報』 第 13 号
- 湯浅慎一 (1986) 『身体の現象学』 世界書院